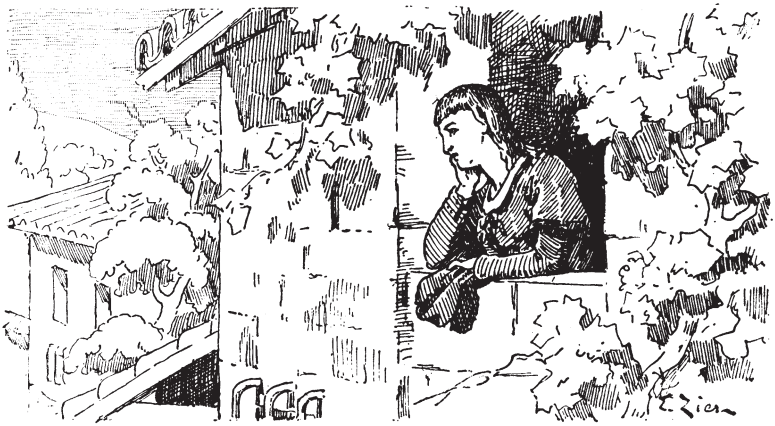
ウィーダの短編二編

ウルビーノの子供

西暦一四九〇年、ウルビーノ公国を、モンテフェルトロ公グイドバルドが統治していた頃のお話です――ちなみに、その年には、とても有名で優雅な女性ヴィットリア・コロンナが生まれています。

その年の春、ミューズの神々に愛され、ボルジア家がとても欲しがったその山岳地帯の国で、小さな男の子が、穏やかで明るい陽の光の中、格子の付いた窓から立って外を見ていました。栗色の目をして、眉の上でまっすぐに切りそろえられた金髪の、かわいい男の子です。喉の辺りに刺繍の付いた小さな青いチュニックを着て、手には同じ色の小さくて丸いフラット帽を持っていました。こんなにすてきな朝なのに、彼は悲しんでいました。というのは、彼よりも十歳も年上のある親しい友だちが、山向こうのボローニャの、フランチェスコ師の所へと昨夜旅立ってしまっていたからでした。その優しい芸術家に弟子入りするためです。この友だち、ティモテオ・デラ・ヴィータは、その子ととても親しくしていて、一緒に遊んだりふざけたり、またおもちゃを作ってくれたりお話をしてくれたりしたのでした。それで、彼はティモテオがいなくなったことでとても心を痛めていたのです。それでも、彼は気にしないよう自分に言い聞かせました。だってティモテオは、「僕は最高の先生の所に、金細工師の弟子として行くんだよ。けれど、僕は画家になるつもりなんだ」と言っていなかったっけ？　その子は、画家になることは、この世界が有するいちばん偉大でいちばん賢いものになることだと理解していました。それを完全に熟知していたのです。というのは、その子はあのラファエロその人だったからです。彼はジョヴァンニ・サンツィオ氏の七歳の息子でした。

彼は、この威厳のある、それでも家庭的で優しいウルビーノの、とても幸せな小さな男の子でした。マラテスタの槍が家や農地を破壊し破滅させた時、彼の親族はこの地に



避難して来たのでした。彼には世界中でいちばん好きな老祖父がいました。愛する母上がいて、とても優しい父上がいました。その父上は、天国の天使たちの絵の中にわが子を描き、うぬぼれ過ぎない自負心と立派な学識、それに芸術への真実の愛に溢れた人でした。そのおかげで、その子は、手にすると鼻に立ち上ってくるカウスリップの花の甘い香りを吸い込むように、呼吸するたびに芸術の香りを吸い込むことになったのでした。

当時、古都ウルビーノに住むのは幸福なことでした。なるほど、アリオスト、ベムボ、カスティリオーネ、またほかの多くの機知に富んだ学識ある紳士たちがそこにやって来たり、浮気者に対してだけは悲しく響く『愛の法廷』が、巧妙な韻と快い感傷を保ったりした後日ほど輝かしい場所というわけにはいきませんでした。でも、そこまで輝かしいとまではいかないにしても、もっと家庭的で、単純で、賢明な平和と断固とした勇気とが手を握り合った平穏の美点に満ちていたのです。市民は、君主と良き友人であり、どんな問題や面倒事も、それを持って宮殿に行くか、市場で大公を引き止めれば、同情と良い助言が必ず得られることを知っていました。幸福で裕福な当時の善良なる人々の中には、美しい物に対する本物の愛と、公共の義務と公共心の感覚、忠誠心と足るを知る心の安らぎがあったのです。

仕事はすべてかっちりと徹底的になされ、生活は質素で、食糧の品質は現在よりもずっと良く、また豊富でした。古く立派な家々は、石はみな堅牢で、装飾は端々まで精巧に施されていました。人々は、自分たちの後に子供や孫たちもそこに住み、過ごせるような憩いの場所を作り、自分たちの嗜好と伝統を窓の鉄細工やドアの木細工に記録させたのでした。人々は、朝の祈りの鐘から夕べの祈りまで、真面目に働いて幸福な日中を過ごしました。その後は静かな

晩の大気の中を散策するか、あるいは何もせず、穀物と果物と森林が豊かな下の平地を見下ろし、お互いに談笑し、自分たちの快適で有益な生活に満足して、病的で忙しい時代にほとんどの人々が抱く、ほかの誰かに羨望の嫉妬を燃やすようなことはありませんでした。

そう、昔のウルビーノとその時代はたいへんすばらしく、私たちの時代のどこよりも幸福だったに違いありません。

あなたは心に思い描くことができませんか？　老いた父親を傍らに、小さな息子が自分の前を走っている、明敏で思慮深いジョヴァンニ・サンツィオ氏の姿を。祝宴の日の聖なる晩に、深い教会の鐘が頭の上で揺れているのを。一日の最後の陽光がフレスコ画の壁、石の砦、城の屋根上の紋章が描かれた旗に差しているのを。町の険しい岩山が、サクランボの果樹園と梨の木の緑の中へとなだらかに続いていくのを。目をつぶって当時のウルビーノを思い浮かべるときにはいつも、私にはそれができます。そして、その時代にあの山間の家に住んだり、また、成人してから全世界に提供することになる周囲のあらゆる美しい景色や音を、自分の幼い魂に知らず知らずのうちに蓄えつつ、幸福で晴れやかな生活を送っているあの神の子に会ったりすることが、私のものになればいいのに、と思うのです。

「あの子には好きなようにさせておけ。あの子は、いつかこれらすべてを描くだろう」自分の絵筆と絵の具がやがてラファエロに受け継がれ、その両手がそれらをもっと力強く握るだろうと想像するのが好きな、賢明なる父君は言いました。いずれ描くかどうかはともかく、その子は、岩山の高所の家からこうして外を眺めることや、葉の茂った果樹園の枝々の下方で風に吹かれている麦の、その下を通って行くあらゆるものを数えることに、決して飽きることがありませんでした。

広大な緑の谷間をそうやって見渡していれば、当時のウルビーノには見るべきものがたくさんありました。兵士たちが木々の間を馬で通過するときの槍の群れ。果樹園や畑の作物を運んでくる商人たちの列。ことによると、背後に荷物や調度や金銀の食器類でいっぱいの荷車を従え、輝く馬具で飾られた白いラバに乗った赤い法衣の枢機卿も。またおそらく、躍動する馬と、紐で引かれている美しい猟犬を伴って、緑色の土地を角笛を陽気に響かせながら出発し、また帰ってくる大公の狩りの一団も。また、羽根飾りが揺れ、鋼鉄をきらめかせ、小旗を空にはためかせる傭兵の一列。あるいはまた、長く青い草をサンダルを履いた足で踏みながら、ゆっくり喜ばしげに岩の高みへ押し寄せようと町へ向かってやって来る灰色の法衣を着た静かな修道士や、エルサレムに入る前に歌われる聖歌を歌っている巡礼者の一団。あなたは、私と一緒に、その当時の世界を見るために、ラファエロとともに窓辺に立てたらとは思いません

か？

ウルビーノの善良なる人々が、しばしばその子を小さな夢想家だと笑ったことは疑いありません。それほど長い時間、彼は立って眺めに眺め――ただひたすら眺め続けていたのです。両目が、他の人が見るようにではなく、もっとよく見ることをすべき権利を持っていたので。

幸運にも、彼の子供時代は平和で、父君が見たような、たいまつが街路を照らし、炎が家屋敷を焼き滅ぼす光景を見たことはありませんでした。

当時のウルビーノでは、陶芸作品が有名になりつつありました。大皿や鉢、それで作られる結婚祝いの皿や薬瓶は、隣のグッビオの製品のライバルになり始めていたのです。大公が婚礼の贈り物やその他の祝祭の機会の贈り物を贈りたいときには、ほとんど自分の町ウルビーノ製の食器セットや珍しい皿を選びました。ところで、その時の陶芸は、すぐ後の時代に得ることが運命づけられているイタリア芸術の中での高い地位を、まだ持ってはいませんでした。皆さんが大きくなったら学ぶように、ギリシャ人とキリスト教徒が粘土の花瓶の中で形と質の美しいもののすべてを使い尽くした後、その芸術は死に絶えたように見え、陶芸家とその絵付師もそれとともに死ぬか、少なくとも何世紀にもわたって眠りに就いてしまったのでした。その一方では、兵士と聖職者たち、貴族と傭兵たちが、国全体をあちらこちら行き来しては踏みにじり、争い、炎とたいまつ、鋼鉄と荒廃を、闘争と強欲さとともにもたらしたのでした。しかし、（私たちが今呼んでいる名称で言えば）マルケ州に善政を敷いた先の善き大公、偉大なるフェデリーコの治世にあって、陶芸家と絵付師たちは、ほかの立派な職人たちとともに、再び顔を上げ始めたのでした。彼らの粗末な窯の慈悲深い炎は、カッスル・ドゥランテ、ペーザロ、ファエンツァ、グッビオ、そしてウルビーノ自身で燃え始めたのです。全盛期はまだ到来していませんでした。ジョルジオ師はまだ若く、オラツィオ・フォンターナも、賢い焼き職人プレスティーノも、有名なフラ・クサントも生まれていませんでした。でも、グッビオではその時でさえ、この仕事にはジョルジオ氏がいたのです。しかし、悲しいかな！　今ではルーヴルの一枚の皿だけが、私たちが持っているすべてなのです。そしてここ、丘の上の大公の町では、貴重で高貴なものが、後に陶芸の名声を広めることが運命づけられている堅牢で光沢のあるマヨリカ焼きの中に、すでに作られつつあったのです。ウルビーノでは、ラファエロ・サンツィオが赤らんだ子供の足で走り回っていた間、瓶、鉢、皿、楕円皿、水差し、洗面器、金属を溶接した大型薬瓶などが作られ、絵付をされていたのです。当時のモンテフェルトロ領の陶芸の師匠に、ベネデット・ロンコーニ師がいました。その名は、オラツィオ・フォンターナや

ジョルジオ師のように、次の世紀で世界的に有名になることはありませんでしたが、師は当時、公国じゅうから寄せられる敬意を楽しみ、ウルビーノ製品の中ではたいへん珍しく美しい物を作っていました。師は、ジョヴァンニ・サンツィオの家のすぐ近くに住んでいて、白髪で、美男で、いくぶん厳格で尊大な人でした。今は中年を過ぎ、パシフィカという名の麗しい一人娘を持っていました。彼はパシフィカをとても大切にしていましたが、自分が作ったものほどではありませんでした。――それは、聖書の物語や、珍しい模様や、彼が周囲で見ていたような風景や、古体字でラテン語の引用句を書き加えた流れる渦巻き模様などを描いた、婚礼用の深皿や楕円形の大皿などでした。それらが描かれると、彼は心配で胸をドキドキさせながら窯に裁定を委ねるのでした。その窯の裁定から外へ出してみると、時にはことごとく砕けていたり、絵がぼやけていたり、傷が付いていたりもしたし、また時には大成功が明らかとなり、マヨリカ焼きの特別な栄光として今日まで称賛されている、虹色で美しく、光沢のあるオパールのような色合いを放ちつつ、震えている彼の両手に包まれたりすることもありました。

　ベネデット師は、野心的で虚栄心の強い人でした。ウルビーノの陶器が、イタリアはもとより、公国内でさえまだ貴ばれる以前から、陶工のろくろ台と絵画の画法に取り組み、つらく困難な成人時代を過ごしました。すでにこの時には、彼のしかるべき真価が重んじられており、作品もまたそうでした。まずまず裕福になり、名芸術家としてマルケを越えて名を知られるようになっていました。しかし、遠くグッビオにジョルジオ氏という、ベネデット師よりも若い男性がいました。後に並ぶ者のないジョルジオ・アンドレオーリ師となった人ですが、この人は彼よりもすぐれた腕前を持っていたのです。その腕前が、夜にはいつもベネデット師を不安におののかせながら眠らせることになったのでした。嫉妬が、ベッドをともにする相手の女性を連れているすべての者にそうさせるように。

　ベネデット師の家は長い石造りの建物で、後ろに全体を耐寒性のバラの木が乗り越えているロッジアを持ち、半分以上が梨の木やプラムの木やヨーロッパクサイチゴが豊かに育った果樹園になっている庭に面していました。彼の仕事場のランセット窓は、この静かな緑に面していました。当時は、このような気持ちのよい仕事場が、この国にたくさんあったのです。穏やかで、敬虔で、家庭的な場所で、外からの鳥の歌声や、ハーブと花の香りで満ちていました。現代の人は、人間で混み合い、悪臭を放つ都会の、狭苦しい工場の部屋で仕事をしています。それに、その人たちの仕事は、生活と同じように味気ないものです。

　隣人サンツィオの小さな息子は、自分の家より大きいベ

ネデット師の家と広い庭に、好きなように出入りしていました。というのは、この家の娘パシフィカがいつでも彼に会うのを喜んでいたし、またこの堅苦しい陶芸の師匠でさえ、彼に対してはくつろいで、過敏で色の消えやすい素焼き陶器に色を乗せる方法を見せてやっていたからでした。

パシフィカは、芳紀まさに十七、八歳ほどの美しい少女でした。後にラファエロがかのサン・シストの聖母の顔を描いた時、彼は彼女のことを思い出していただけだったのかもしれません。彼は、あらゆる美しいものや、すべての親切な人々を愛するように、彼女のことも愛していました。また、この厳粛で、静かで、甘い香りが漂い、陽光が差し込み、影の多い古いベネデット師の家を、彼の最愛の父上のアトリエや、親愛なる老祖父の楽しい小さな仕事場よりも、さらに愛していたと言ってもよいくらいでした。

この時ベネデット師には、陶芸家になるために修行している四人の徒弟、すなわち弟子がありました。そのうち、ラファエロが（パシフィカもそうでしたが）いちばん好きだったのは、山の中の北の村出身のルカ・トレッリでした。気高く浅黒く、少し悲しげな美しい顔立ちを持ち、勇ましい足取りと、兵士の輝く鎖よろいと絹の胴着を着れば引き立ったであろうしなやかで背の高い細身の容姿を持っていました。実際、ルカ氏の精神は、工房のろくろと絵筆のためというよりは、戦とその危険ならびに栄光のために作られていたのです。しかし、彼はある気楽な祝日にウルビーノにやって来て、彼女が吸うのと同じ空気を吸い、彼女が住むのと同じ屋根の下に住みたいという熱望が湧き上がるや否や、後先を考えず彼女の父上に仕える契約を結んでしまったのでしたが、それ以来ずっと、彼はパシフィカを愛していたのです。彼の労苦の報酬はひどく少ないものでした。ミサと食事の時間に彼女を見ること、時々彼女のために泉から水を汲んできたり、彼女の鳩たちに餌をやったりするのを許されること、彼女の灰色のガウンが果樹園の木々の間を下りていき、陽光を受けるのを見ること、彼女の糸車のうなりや彼女がヴィオールをつま弾くのを聴くこと――これが二年間で彼が得た歓びの最大限だったのです。彼には、ラファエロがロッジアの敷石に沿って走り、彼女の腕の中に飛び込んだり、彼女のスカートにしがみついたり、彼女と一緒に夏の果物を摘み取ったり、彼女と一緒に秋のハーブを乾燥させるために分類したりしているのが、どれほどうらやましかったことでしょう！

「パシフィカを愛しているんだ！」彼はうめきながらラファエロに言います。すると、ラファエロは微笑みながら言ったものです。「ああ、ルカ、僕もだよ！」

「それは同じじゃないよ、君」ルカはため息をつきました。「私は彼女を妻に欲しいんだ」

「僕は奥さんなんかいらないな。絵と結婚するつもりだか

Raphaël l'aidait à cueillir les fruits.
ラファエロは果実を摘むのを手伝った。

ら」きれいな金髪の庇の下から外を見ている、少し重々しい思慮深げな顔で、ラファエロが言いました。彼がこんなことを言うのは、父上が青色や金色の地面の上でシュロの枝を持つ聖人たちを描いているのや、ベネデット師が天使たちの翼や預言者たちのローブや生き生きと語られる聖伝で、つやのない陶土を輝かせていくのを、飽きることなく見つめていたためです。

さてある日、ラファエロがその陶芸家の家のお気に入りの窓に立ち、前に書いたような具合に外を眺めていた時、彼の友人ルカも暗い顔をしてそこに立ち、あまりにも深く嘆かわしげなため息をついたので、その子供はびっくりして夢のような気分から覚めたのでした。

「ねえルカ、どうかしたの？」彼はその若者の膝に両手を回して、小声で言いました。

「おお、ッファエロ！」その徒弟はひどく嘆きました。「パシフィカと結婚するチャンスがあるんだ。私にあんな、グッビオのジョルジオが持っているような才能がありさえすれば！　もし神が私に、ここでは何の役にも立たない、森の猪みたいな体の強さや筋力の代わりに、名人の腕をお与えくださってさえいれば！」

「どんなチャンスなの？」ラファエロは尋ねました。「それに、パシフィカに何か変わったことでもあったの？　彼女は何も言ってなかったよ。僕は一時間も一緒にいたのに」

「ああ、おちびさん、彼女は何も知らないんだよ」ルカはもう一度、胸のいちばん底から盛大なため息をつきながら言いました。「実は、今朝早く、大公から新しい注文が来たんだ。大公は、エステルの物語を描いた最高に美しくて丈夫な皿と甕をご所望だ。今日から三ヶ月以内に準備して、その後ゴンザガの従兄弟殿に贈られるものだ。大公は、この仕事には金をいくらかけてもよいが、そこにはできる限り最高の絵を描くようにとお命じになった。賞金として五十スキュージをくださる。ベネデット先生は、どうやらこの注文のことをいつのまにか小耳に挟んでいたようで、大きな楕円形の皿と胴の膨らんだきれいな甕をいくつか用意なさっていた。先生は、弟子たちそれぞれにそれらを一つずつ渡された。私、ベレンガリオ、ティト、それにゼノーネにね。先生は、ご自分の視力では大公のご命令を全うするのはもう無理だと、ひどく取り乱していらっしゃる。だが、もし我々の一人が大公の称賛を勝ち取るだけの幸運の持ち主であるならば、その画家がここで先生の共同経営者となり、パシフィカと結婚することになるのだ。このことは、もうみんな知っている公然の秘密なんだよ。中には、先生は、自分の工房で作り出せる最高のものを生み出すための刺激剤としてこんな約束をしただけだ、と言う人もいるけれど、私はベネデット先生をよく知っているし、そんなごまかしの罪を犯すような人だとは思えない。先生

は、言ったことは実行なさるお方だ。もし甕と皿が大公のお褒めにあずかれば、その甕と皿はパシフィカをも勝ち取ることになる。いいかい、ッファエロ、私が身を切られるほどつらいのはね、私はろくろや窯を使うことにかけてはかなりの腕前だし、粘土の扱いやそれで何かを作るのは嫌いじゃないのだが、粘土に絵を付けるのはまだまだ素人で、ベレンガリオや小さなゼノーネにもかなわないのが確実だってことなんだ」

ラファエロは、友の膝に自分の肘をもたせかけ、両手のひらの上に顎を乗せながら、このすべてを黙って聞いていました。彼は、ほかの弟子たちが友人ルカよりもずっと上手な絵描きであることは知っていましたが、その者たちは誰一人としてルカのようなきれいな心も若々しい立派な容姿も持たないし、また乙女パシフィカがその者たちの誰も愛していないことも知っていました。

「甕と皿を仕上げるのにどれくらいの時間があるの？」彼はようやく尋ねました。

「三ヶ月だよ」ルカは前にもまして悲しげなため息をつきながら言いました。「でも、それが三年だったとしても、どんな違いがあるっていうんだい？　棒でたたいてラバにスピードを上げさせるみたいには、芸術の神様のお恵みを人間に棒でたたき込むわけにはいかないさ。その期間の終わりになっても、私は今と同じウスノロのままだろう。君のすてきな父君が夕べ私に言ったんだ。あの方は私に良くしてくださるし、私のことを軽視してもいない。君の父君はこう言った。『ルカよ、おまえがパシフィカを手に入れたいと嘆くのは、月を手に入れたくて嘆くのと同じようなものだ。もしあれが私の娘であったのなら、私はおまえにあの子をくれてやったことだろう。おまえは黄金の心を持っているのだからね。だが、ベネデット師はそうはするまい。言いにくいが、おまえでは、薬屋のモルタルや床屋の洗面器を装飾するくらいしかできないだろう。もし気に障っても、悪く思わないでほしい。おまえのために言うのだが、もし私がおまえのようなたくましい若者であったなら、フランスやスペイン、あるいはローマへ行って、傭兵隊員として自分の運を試してみるところだろう。おまえは兵士に向いていると思うからだ』君の父君でさえ、私に言うことのできる最上の言葉はこんなものだったというわけさ、ッファエロ」

「でもパシフィカは？」子供は言いました。「パシフィカは、あなたが傭兵隊に加わることなんか望んじゃいないんでしょう？」

「それはわからないさ」ルカは絶望的に言いました。「たぶん彼女にとってはどうでもいいことなんじゃないかな」

「いや、絶対に気にするよ」ラファエロが言いました。「だって、彼女はあなたを愛しているんだもの、ルカ。女

の子だし、ベネデットさんが反対だから口には出せないけれどね。でも、あなたが彼女のために飼い慣らしたゴシキヒワを、彼女がどんなに愛していて、どんなに大切にしていることか。それって、ルカ、半分はあなたのためで、残りが鳥のためなんだよ！」

ルカは彼にキスしました。

しかし、涙が哀れな若者の頬を伝っていました。彼は真剣で、絶望的な気持ちでいっぱいだったのです。

「たとえ彼女が私を愛してくれていて、これからもそうだとしても」彼は絶望してつぶやきました。「彼女は決してそれを私に打ち明けてはくれないだろう。彼女の父上が、私の思いなど許すはずがないからだ。それに、今度の大公の注文における技量審査が、事をいっそう悪い方向に運んでいる。あの高慢ちきなファーノのベレンガリオが彼女を勝ち取ったりしたら、そのときこそ私は本当に傭兵部隊に身を投じて、神が私に素早く赦しと死とを与えてくださることを祈ることになる」

ラファエロはしばらくの間、かなり考え込んでいましたが、やがて頭を上げて言いました。

「僕に考えがあるんだ、ルカ。でも、あなたがそれを僕にやらせてくれるかどうか」

「君は天使さ！　親友のこのルカが、君のことを拒んだりすると思うかい？　でもね、私を助けようというのなら、君、そんな考えはその小さな胸の中から永久に取り除いてくれたまえ。誰も私を助けることなんかできないのだから。ッファエロ、聖者たちだって無理さ、私は生まれつきのウスノロなのだから！」

ラファエロは彼にキスをして言いました。「ねえ、聞いて！」

数日後、ベネデット氏は、大公の御命令と自分の意向を、格式張った会見で弟子たちに告知しました。氏は、若者たちに対し、自分の娘の名前は出しませんでしたが、作った焼き物が大公のお眼鏡にかなうだけの幸運と優秀さを持つ者なら誰でも、氏の高名な工房の共同経営者となる栄誉を授かるだろうとはっきり言いました。今や、パシフィカが初めての聖体拝領に行って以来、共同経営者となるのにじゅうぶんであると彼女の父上を満足させた者は、夫として彼女のことも満足させなければならなくなるということが、ウルビーノじゅうに知れ渡っていました。当時は、娘の願いを聞いてやるということはあまりなく、その陶芸の師匠が娘の都合を考えてやるより前に、このように自分の好きなように娘を扱うことについて、不当だとか残酷だとか考える人は一人もいなかったのです。そして、その若者たち全員の心をおののかせ、どん底にたたき落としたのは、ベネデット氏が自分の徒弟のみならず、ウルビーノ公国生まれの誰にでもこの競争への参加を提供したことでした。ど

んな英雄が無名の人々の中から歩み出て、このパシフィカの美しい手を取るというすばらしい褒賞を得ることにならないと、誰が言うことができるだろうか？　彼女との結婚とともに、たくさんの大判ダカット金貨と、広大で古い灰色の石造家屋の相続権と、黒ずんだ良い香りのする飾り棚に保存された多くの古い宝石と古いブロケードと、城門の外の西に広がる低い牧草地の中の、とうもろこしや果物の木々とともに微笑む一つならぬ良質の土地などもまた、与えられることになるでしょう。

ルカは、そうした褒美のことはまったく考えもしませんでしたが、ほかの三人の弟子たちは、そのほかの若者たちと同じようにそれらについて考えていました。もし公国生まれに限るという制限がなかったならば、アペニン山脈の向こう側からは勇ましい若い画家たちが、街自体が美しいフィレンツェの仕事場やロンバルディアの街々からは元気な焼き物職人の徒弟たちが、馬を全速力で駆りつつ大急ぎでその地へと旅に出て、大挙してこの貴重な報酬を得るために粘土に絵を描きにやって来たことでしょう。しかし、それはウルビーノの人間でなければなりませんでした。そして、岩の上から真っ逆さまに身を投げてしまいそうなほど絶望に打ちひしがれていた哀れなルカは、このあまりにもわずかな幸運――競争相手の数が制限されたという――にさえも、運命に対して感謝をするのでした。

「もし私があなただったら」かつてジョヴァンニ・サンツィオは、ベネデット氏に丁重に、しかし思い切って言ったことがありました。「自分の娘婿には、自分が知っている中で最高の若者を選ぶと思います。最高の画家ではなくてね。恐れながら申し上げますが、先生、最も偉大な芸術家が必ずしも最も誠実な人間とは限りませんし、家庭にあっては、時には謙遜の美徳がいちばん要求されるものですよ」

その時ベネデット氏は、ジョヴァンニ師がどの若者の名前を出したがっているのかがよくわかっていたので、火打ち石のように険しい顔をしていました。

「私の工房の名声を維持するためには、良い芸術家が必要なのだ」彼は頑固に言いました。「私の視力は以前のようではない。それに、ペサロやグッビオやカステル・ドゥランテが日々勢いを増していく一方で、ウルビーノの製品が衰退していく様子など、私は見たくないのだ。もし何らかの好条件に対して生じる対価というものがあるのなら、パシフィカはすぐれた芸術家の娘に生まれたことの対価を支払わねばならぬ」

陽気で、すぐれた才知の持ち主であるサンツィオは、心の中で苦笑しつつ、黙って帰って行きました。アンドレア・マンテーニャを愛する彼は、陶芸の老大家の自画自賛に敬意をもって頭を下げる気にはなれませんでした。実際のところ、それはいくらかうぬぼれ過ぎと言ってよいもの

だったのです。

「かわいそうなパシフィカよ！」彼は思いました。「もし私のッファエロがあと十歳ほど年長でありさえすれば！」

彼は、自分の年若い息子を待ち受けている、輝かしく、驚異的で、並ぶ者のない将来を予測することはできませんでした。ですから、自分の息子には、モンテフェルトロ宮の壁に守られたこのなじみのウルビーノで、穏やかな画家としての人生を歩んでほしい、それがいちばんだと願っていました。

ところで、ラファエロはどこにいたと思いますか？　半日、あるいは一日中、いられる限りは毎日いた場所は？　どこだと思います？　そう、実はルカの屋根裏部屋にいたのです。ほぼ自分と同じくらいの大きさの甕と皿を前にして。その屋根裏部屋は、ベネデット師の住居の屋根を支えているアーチの下の、風通しが良く、飾りのない場所でした。弟子たちは、それぞれにこうした屋根裏部屋の一つを占有していました。めったにない恩恵ですが、ルカは、その恩恵に非常に感謝することになりました。というのも、この部屋がなければ、彼は彼の天使を隠すことができなかっただろうからです。そして、最初に相談に乗った日に、ラファエロが彼に囁(ささや)いた秘密とは、「僕に絵を描かせてみてよ！」というものだったのです。

長い時間、ルカは答えるのをためらいました。実際は、

Il était devant un vase presque aussi grand que lui.
彼は自分とほとんど同じくらいの大きさの甕の前にいた。

その小さな話し手への愛と敬意からの配慮によって、声に出して笑うことを慎んだだけだったのですが。チューリップが麦を赤く照らすこの四月にやっと七歳になったばかりの幼いサンツィオが、マントヴァのゴンザガ家に贈られるマヨリカ焼きの皿と甕に絵を描くなんて！　彼の親友は、その大胆不敵な思いつきに対し、大声で笑い出すのを抑えられそうにありませんでした。それでも、彼を見上げている、あまりにも真剣なラファエロの顔――澄み切った荘厳なまでの自信、いえ、それよりもたぶん、神と神の恩恵に対する揺るぎない信頼をみなぎらせた顔――を見ると、彼も真面目にならざるを得なかったのです。

「やらせてよ！」その子供は百回も繰り返し言いました。彼は誰にも言うつもりはありませんでしたが、ルカだけは知ることになります。もし不首尾に終わったとしても――そう、弁償すべき失敗した焼き物が残るだけだ。大公と廷臣たちが、彼の父上が描いたサン・ドメニコ・ディ・カーリの祭壇のフレスコ画の図案を見に来た時、大公がくれた二ダカット足らずのお金があったじゃないか？

彼があんまり熱心に言う上に、これ以上ないほどの絶望感があまりに大きくて心がうつろであったため、ルカは、今度は懇願の方に傾いてきました。「私にできることは何もない、か」彼は、自分の不器用な図案を見ながら苦々しく考えました。「聖者は時に、子供の天使の助けによって奇跡を起こされる」

「奇跡じゃないよ」このつぶやきを聞きつけたラファエロが言いました。「僕自身と、神様が僕の中に注ぎ込んでくれたものとで、あなたを助けるんだ」

その時から、ルカは彼のしたいようにさせることにしました。それで、この快い初夏の日々の間じゅう、その子供はやって来て、屋根裏部屋に閉じこもり、研究したり、考えたり、制作したり、また気分や仕事の具合に応じて、額にしわを寄せたり、静かな満足を感じて微笑んだりしたのでした。

その時ジョヴァンニ・サンツィオは、祭壇の絵を描くためにチッタ・ディ・カステッロに行っており、彼の小さな息子は、今回ばかりは父上が不在であることを喜んだのでした。ジョヴァンニ師ならきっと、ラファエロの長時間にわたる頻繁な屋根裏部屋への訪問に気づいたでしょうし、そうなればたぶん、彼にラテン語の本を読みなさいとか、野原で運動してきなさいとか命じたところでしょう。しかし、彼の母上は、彼が楽しんでいて、安全であることに満足して、何も言いませんでした。パシフィカは彼を好いてくれているし、彼女の家に世話になっていれば危ない目に遭うことはないということをよく知っていたのです。パシフィカ自身は、彼が屋根裏部屋にあまりにもこもりっぱなしで、自分の相手をしないことを不審に思いました。けれ

どもある日、彼女が尋ねてみると、そのかわいらしい顔をしたいたずらっ子は彼女にしがみついて小声で言いました。「おお、パシフィカ、僕はルカにあなたを勝ち取ってほしいんだ。だって、彼はあなたを愛しているんだから。僕は二人とも大好きなんだよ！」それで彼女は青ざめ、答えました。「ああ、そうね、あの人、そうできればね！」彼女はそれ以上は一言も言わず、糸車のところに行きました。そしてラファエロは、彼女のまつげから大きな涙のしずくが亜麻布の中に落ちるのを見たのです。

彼女はラファエロが、ルカがどんなふうに絵を描いているかを見に屋根裏部屋へ行っているのだと思っていました。そのためにその子をこれまで以上に愛おしく思いましたが、絶望した心の中では――ルカもまたそうでしたが――、その善良でたくましい若者が、マントヴァのゴンザガ家への大公の贈り物となるような逸品など絶対に作れないだろうとわかっていました。そして、彼女はルカを愛していたのです！　彼とは本当にめったに話をしませんでしたが、同じドアを出入りし、同じ教会の礼拝に行き、同じ屋根の下に住んでいたのですから、彼もこの頃は、言葉や花やセレナーデを捧げる手段を見つけていたのでした。彼はとても顔立ちがよく、勇敢で、優しくて、敬意に満ちてもいました。哀れなパシフィカは、彼が絵を描けるかどうかには少しも関心がありませんでした。彼なら自分を幸せにできるのに――思うことといえばただそれだけだったのです。

屋根裏部屋でラファエロは、自分の快活な子供の人生のうちでいちばん不安な時間を過ごしました。彼は、自分がしていることを見ることをルカにさえ許すつもりはありませんでした。ドアにかんぬきを差して働きました。部屋から出るときは、自分の力作を洋服だんすの中に入れ、鍵を掛けました。ツバメがガラスのない窓から出入りして、彼の周囲を飛び回りました。そこからは朝の陽光も入ってきて、彼の金髪の頭の周囲に、父上が聖人たちの頭の上に輝かせたような後光を作りました。ラファエロは、トランペットのファンファーレやシンバルを打ち鳴らす音が、下にはたくさんの見る価値があることが行われていることをしばしば告げても、脇目も振らずに制作に打ち込みました。彼はたった七歳でしたが、まるで大人のように熱心に働きました。彼の小さく赤らんだ指が握っているその鉛筆が、彼が生きている間も死んだ後も、どんな王様よりも彼を有名にし、また最後の眠りについた彼の華奢な肉体を、ローマのパンテオンに安置させることになったのです。

彼は、自分に取り憑いた着想を形にするのに成功するより前に、何百枚もの紙を構図で埋め尽くしていました。とうとう満足のいく構図が描けた時、彼はウルビーノのマヨリカ焼きの特徴である微妙な光を放つ金属の上薬で、自分の想像力を色付きで粘土に移し替える作業に取りかかりま

した。
ああ、彼はどんなに喜んだことでしょう！　二歳になったその時以来、父上が、自分に絵を描かせてくれたことを。そして最近になって、ベネデット師が、その公国の陶器製造の特別な栄光である、素焼きに絵を描く上での、また金属の上薬を作る上での奥義のようなものを自分に見せてくれていたことを。
彼はどんなに喜んだことでしょう！　創造の仕事で好きなように自分の能力を発揮できる初めての歓びに、どんなに小さな心が弾み、歌うように思われたことか！
ある有名な作家が、天才とは苦労をし続ける力である、と言いました。でも、彼はむしろ、その力もそうだけれども、それよりも何よりも、天才とは努力をすることなく楽しみながら、すばらしい作品が自然に湧き出てくるような力を持つ、と言うべきでした。
ルカは彼を見て（作品を見たのではありません、その子供はそうしないよう彼に約束させていたので）、その没頭ぶりや真剣さ、また明らかに容易にすらすらと運んでいるその仕事ぶりに驚き始めました。開かれた楕円形の窓とその向こうの青空を背景にして、テーブルの何もない天板の上に置かれた大きな皿に向かってかがみ込んでいるその小さな姿は、幼年時代の神聖さ以上に聖なるものになり始めました。そしてまた、ラファエロの顔もとても真剣に、色を失うようになっていき、また彼の栗色の両目はとても大きく、厳粛に、暗い色合いを湛えているように見えました。
「ジョヴァンニ氏が万一このことを知ったなら、私に腹を立てるだろうな」哀れなルカは考えました。しかし、今となっては状況を変えるには遅すぎました。サンツィオ少年の方が、彼の主人になってしまっていたのです。
こうしてラファエロは、チューリップが咲いてしおれ、スイカズラが生け垣で花開き、陽光の中、はるか下方に横たわる静かな農地で小麦と大麦が収穫された間、ほかの誰にも知られずに、屋根裏部屋でひたすら働き続けたのでした。真夏がやって来て、三ヶ月はあと一週間を残して過ぎ去りました。
ある日の午後、ラファエロはルカの手を引いて言いました。「来て」
彼はその若者を、この春と夏の九十日もの期間を過ごした、ガラスのない窓の下のテーブルに導きました。
ルカは大きな叫び声を上げました。そして、じっと見つめに見つめながら立ち尽くしていました。それから彼はひざまずき、子供の小さな両足を抱きしめました。それは、生涯が称賛の美しい歌となる彼が、人から初めて受けた崇拝でした。
「ねえルカ」彼はやさしく言いました。「よしてよ、そんなこと。もしこれが本当に良いものであるならば、神様に

Il conduisit le jeune homme près de la table.
彼は若者をテーブルのそばに連れて行った。

感謝しよう」

彼の友が見たものは、絵筆や道具類や周囲に散らばった絵の具とともに、太陽の光をいっぱいに受けて立っている楕円形の皿と大きな甕（壺と言ってもよい）でした。それらは光沢のある乳白色の色合いと、天上の栄光のようなすばらしい光彩と、溶けた宝石のような虹色の微光とで輝いていました。そしてそれらの上には、細工されたあらゆる種類の優美な象徴と古典的な図案がありました。縁はモンテフェルトロ家の紋章を支える天使と花で飾られ、風景はウルビーノ周辺の柔らかく素朴な風景でした。山々は、アペニン山脈が夕暮れ時に帯びる荘厳な輝きを持ち、絵の中央には白衣をまとい、黄金の冠をかぶったエステルがいて、小さな画家はその顔にパシフィカの顔を描いていたのでした。赤ん坊のような手で描かれたこの驚くべき創作は、安全に、またこっそりと窯の試練を通過して、しみもひび割れも作ることなく取り出されていたのでした。

ルカは、それ以来ずっと世界中の人々がひざまずくことになったように、ラファエロの足元にひざまずくのをやめませんでした。

「おお、すばらしい子よ！　おお、人の世に送られた天使よ！」哀れな徒弟は、じっと見つめながらため息をつき、感極まって泣き出したのです。

「神様に感謝しよう」小さなラファエロはもう一度言いました。そして彼は、この奇跡を成し遂げた小さな両手を合わせ、「主の賛美」を唱えたのでした。

この貴重な甕と大皿が洋服だんすに移され、その格納所の鋼の鍵の背後に安全にしまい込まれた時、この神々しい子供の賢明さに二十歳も遅れを取っているような気がしているルカは、おどおどして言いました。「でもね、君、私には君の驚異的で最高の成果が、私のためにどんなふうに役に立つのかがわからない。たとえ君がそれを私のものとして通すことを許してくれたとしても、そんなものは受け取れないよ。それはぺてんだし、恥ずべきことだろう。パシフィカを勝ち取るためであっても、私にはとても同意できない」

「そんなにあわてないで、ルカ」ラファエロは言いました。「もう少しだけ待って、見ていてよ。僕に考えがあるんだ。僕を信じて」

「神が君を通して話しているんだ、信じるよ」ルカは謙虚に言いました。

ラファエロは答えず、階下に走って行きました。そして、通りかかったパシフィカに、いつもの愛情のこもった抱擁よりもさらに愛を込めて彼女に腕を巻き付けました。

「パシフィカ、大丈夫、元気を出して」彼は囁き、質問されないうちに母上の所へ走って帰って行きました。

「それって、ルカがうまくやったということかしら？」パ

シフィカは考えました。しかし、彼女は、あの子の願望の方が判断力を上回ってしまったのではと不安になりました。彼は鑑定家ではあり得ない、七歳の子供なのだから。たとえあの子が、あの尊敬すべき名画家で名詩人であるジョヴァンニ・サンツィオの息子であったとしても。

翌日は聖ヨハネの日でした。焼き物はすべて、今日の午後にベネデット氏の工房に置かれることになっていました。それからグイドバルド大公がやって来て、それらの中からよい作品を選び取ることになるはずです。その陶芸の師匠は、モンテフェルトロ卿の目が競合している美術品の上に注がれるまでは、自分もそれらを見るつもりはないと宣言しました。その小さな理由としては、彼が宮廷に仕えていたためで、より大きな理由としては、誰が選ばれようがまったく無関心であることを装いたくて、またえこひいきをしていないということを示したかったがためでした。

パシフィカはというと、彼女は自室に鍵をかけて閉じこもり、一人で激しく動揺していました。若者たちはふんぞり返って歩き回り、お互いにあざけり合ったり自慢したりしていました。ルカは一人だけ離れて座り、古いリュートをつま弾いていました。ジョヴァンニ・サンツィオは、夕方にチッタ・ディ・カステッロから馬で戻っており、自分の家から会場に入ってきて、その若者の肩に自分の手を置きました。

「ペサロから来た者たちがすばらしい作品を持って来たと聞いている。だが、元気を出しなさい。ことによると、パシフィカの結婚についてのこの過酷な処遇を、彼女の父上に思いとどまらせるよう大公に懇願することもできるのだからね」

ルカは疲れ切ったように首を振りました。

彼にはわかっていました。なるほど、そこには一つの美しい作品が展示されることになるだろう。だが、それが自分にとってどんな役に立つというのか？

「あの子――あの子は――」彼は口ごもって言い、それからラファエロの秘密を暴いてはならないことを思い出しました。

「私の子のことかね？」ジョヴァンニ氏が言いました。「おお、あの子はここに来るよ。きっと来る。絵を見ることができる場所なら、どこだっていつだって必ずやって来るのがラファエロだ」

そして、その親切な男性は、ベネデット氏に挨拶をするためにロッジアから中へとのんびり歩いて行きました。そのベネデット氏は、くすんだ色のベルベットのダブレットと鮮やかな深紅の上着を着て、大公の馬のひづめが石を打つ音が聞こえたら、いつでもすぐに帽子を取って道に出ていくことができるよう、立って待っていました。

「あなたは内心では不安なのでしょうね」ジョヴァンニ氏

は彼に言いました。「ペサロから来た若者がよい作品を持って来ているそうですよ。もしあなたの仕事場と家に、見ず知らずの人間を入れなければならないとしたら――」

「その者が才能ある人間であるならば、歓迎する」ロンコーニ師は尊大に言いました。「ペサロの人間だろうがファーノの人間だろうがカッスル・ドゥランテの人間だろうが、私は約束を破ったりはせぬ。たとえ私の障害となろうとも、ずっと約束は守る」

「それがここであなたに、歓びと勝利をもたらしてくれるだけで終わることを祈りましょう」隣人は言いました。彼には、ベネデット氏が正直で誠実な人間だということがわかっていました。あまりにも頑固で、ウルビーノでの自分の地位についてうぬぼれ過ぎであったとしても。

「我らが大公様！」人々が道に立って叫びました。ベネデット氏は、わが主人が自分の工房を訪問してくれた栄誉を授かるため、おごそかな歩みで外に出て行きました。

ラファエロは音を立てずに父上の傍らに忍び寄り、サンツィオ氏の手の中に自分の小さな手を滑り込ませました。

「おまえは、まさか我らが善きグイドバルド様を恐がっているのではないだろうね！」父上は笑って、また多少驚きながら言いました。というのは、ラファエロがとても青ざめて、下唇がかすかに震えていたからです。

「うん」子供はただそう言っただけでした。

Le maître potier introduisit le duc.
陶芸の師匠は大公を招き入れた。

若い大公とその廷臣たちは、道を馬でやって来ました。そして、陶芸の師匠の古い石造りの家の前で止まりました。朝用の軽装ではありましたが、立派な紳士の一団で、彼らの下では見事なバーバリーの馬がはみをかみ、年少の小姓たちと制服を着た従者たちがその足元を取り巻いていました。狩りに行ったり貴族を訪問したりするのでない限り、グイドバルドはその父君同様、市民の一人のようにウルビーノを歩き回るのが常でした。しかし、彼はベネデット師の尊大さといくらかうぬぼれの強い気性を知っていて、その無害な虚栄心を愛想よく満足させてやることをいとわなかったのでした。陶芸の師匠は平身低頭して、自分の工房の中へと後ずさりしながら先導していきました。廷臣たちが大公の後に続きました。小さな息子と一緒のジョヴァンニ・サンツィオと、そのほかの特に許されたわずかな人たちも、しかるべき距離を取って中に入りました。仕事場のずっと端の方に、弟子たちと、この場所に競技用の作品があるペサロや公国のほかの場所から来た画家たちが立っていました。全部で十人ほどの競技者がいました。義務としてほかの者の作品と一緒にテーブル上に自分の作品を置いていた哀れなルカは、深い溝の格子窓のいちばん濃い影の中に自分の惨めさを隠そうと退いて、全競技者の最後尾に立っていました。

陶器画家たちの仕事日用のテーブルとして供給されている細い縦板の作業台の上に、それぞれ番号が振られた皿と甕が並べられ、どれにも名前はありませんでした。それは、ベネデット氏が作品選考について絶対に公平であることを証明しようと決意していたためでした。彼は最高の芸術家を望んでいたのです。グイドバルド公は、赤紫の帽子をうやうやしく取って、長い部屋を歩き、それぞれの作品を順に吟味しました。総じて、集まった作品はマヨリカ焼きのすばらしい展示となっていましたが、大公はそれぞれ個々の作品の成果には、おそらく少し失望したようでした。ありふれた並の水準から脱した、完全無欠なものを求めていたためです。それでも大公は、このすばらしい展示会について公平な言葉でベネデット師に賛辞を述べました。ただし、哀れなルカの作品の前では、完全に沈黙しただけでした。はっきり言って、それに対して示すことのできる最高の思いやりは、沈黙することだったからです。ルカの絵は、線描の方は力強く均整が取れていましたが、色彩については絶望的に粗野で、けばけばしく、不愉快なものになっていました。

最後に、縦板の作業台のいちばん端に控えめに置かれた壺と皿の前で、大公は突如歓喜の叫び声を上げました。ベネデット氏は歓びと驚きで真っ赤になり、ジョヴァンニ・サンツィオはといえば、モンテフェルトロ卿から驚きの叫びを上げさせたのは珍しく美しいものに違いないと確信し

て、人混みを押し分けてもう少し近くに寄り、宮廷の紳士たちの肩越しに何とかそれを見ようと努めました。そして、それを一目見て、わが哀れな友人ルカにはいかなる希望も残っていないと悟ったのでした。

「これは群を抜いている」グイドバルドは、大きな楕円形の皿を両手で丁重に持ち上げながら言いました。「ベネデット先生、私はあなたがこのような弟子をお持ちであることを心からお祝い申し上げたい。この者は、わが愛するウルビーノの栄光となるであろう」

「それはたしかに最高傑作でございます、大公様」陶芸の師匠は驚きに震えながら言いましたが、自分の工房でこんなにも優れた作品を見いだしたことで感じた感動と驚きをすっかり表現することは自制しました。「これはきっと」ベネデット氏は付け加えました。彼はとても正直な人だったからです。「ペサロかカッスル・ドゥランテから来た若者の誰かの作品でしょう。私の作業場にはこのような名匠はおりませぬ。これはあまりにも美しすぎます！」

「これはこれと同じ重さの黄金の価値がある！」感動を共にしながら大公が言いました。「見よ、諸君――見よ！これがあれば、ウルビーノの名声は、アペニン山脈やアルプスを越えて広がっていかないことがあろうか？」

こうして呼び寄せられたために、廷臣たちと市民たちがそれを見ようと集まって来て、こんなマヨリカ焼きの絵付は、ウルビーノでは本当に見たことがないと断言しました。

「それにしても、誰の作品なのだ？」背後に集団を形成している徒弟たちと画家たちに視線を注ぎながら、グイドバルドはもどかしそうに言いました。「ベネデット先生、どうかこの画家の名前を――頼む、早く！」

「十一番という番号が振られてございます、わが君」陶芸の師匠が答えました。「さあ、この番号に該当する者は、前に出て名を名乗れ。わが君大公様がそなたの作品をお選びになったのだ。さあ、ほら！　聞こえたか？」

しかし、その集団の中に動く者はいませんでした。若者たちはお互いの顔を見合わせました。この名もなき競争相手は誰なのか？　集団には十人しかいなかったのです。

「さあ、ほら！」ベネデット氏は腹を立てながら繰り返しました。「おい、驚きすぎて口がきけないのか？　この作品を制作したのは誰なのだ？　黙っていては大公様にも私にも無礼であるぞ！」

その時、サンツィオ少年が、繋いだ父上の手から自分の小さな手を離し、前に出て、陶芸の師匠の前に立ちました。「僕が描きました」彼はうれしそうに微笑みながら言いました。「僕です、ラファエロです」

言わなくても、想像できませんか？　この少年芸術家の発見に続いて起こった混乱、驚嘆、歓喜、不審、疑問、興奮した称賛の熱狂ぶりを。ただグイドバルドの御前である

Le duc ôta de son cou une chaîne d'or.
大公は自分の首から金の鎖を外した。

ということだけが、多少は礼節をわきまえた平静さのうちにこの状況を保ち得たのでした。そして彼、彼はまさに大公という身分であったにもかかわらず、目が潤み、胸がいっぱいになるのを感じていました。それは、大公自身には子供がなく、ジョヴァンニ・サンツィオがその日感じた歓びと引き替えになら、自分の国と財産を与えてもよいとまで思ったからです。

彼は、自分の胸から金の鎖に吊された宝石を取り、ラファエロの肩に掛けました。

「それが最初のご褒美だよ」彼は言いました。「君はもっとたくさんのご褒美をもらえるからね。おお、すばらしい子よ、我々が死んで塵になった後でも、君は生き続けることだろう！」

それまでずっと、まったく話さず平静を保っていたラファエロは、大公の手にとても愛らしい態度でキスをし、それから自分の父上の方を向きました。

「本当に僕が大公様の賞を取ったの？」

「本当だとも、私の天使よ！」ジョヴァンニ・サンツィオは、声を震わせて言いました。

ラファエロはベネデット氏を見上げました。

「それなら、僕はパシフィカとの結婚を要求します！」

周囲のどの顔にも、負かされた画家たちの沈んだ顔にさえも、微笑が浮かびました。

「おお、実際、おまえが結婚して私の息子になる年齢であったならそうするのだがね、おまえは私の息子同然なのだから！」ベネデット氏は小声で言いました。「かわいい、奇跡のような子よ、だが、おまえは冗談を言っているのだね。おまえが本当に欲しいものを言ってごらん。私はいっさいおまえを拒むことはできない。今や、私の師はおまえなのだ、本当だよ」

「僕はあなたの弟子です」ラファエロは、かわいらしく真面目な微笑みを浮かべ、その小さな指で大公の宝石をもてあそびながら言いました。「僕は、あなたが彩色の秘訣と方法を教えてくださらなかったら、向こうのあのマヨリカ焼きに色を塗ることはできませんでした。さあ、僕の大切な先生、それに、おお、僕の大公様、僕の言うことを聞いてください！　競技会の条件によって、僕はパシフィカとの結婚と、ロンコーニ先生と共同で仕事をする権利を勝ち取りました。僕はその権利をもらい受け、それを僕の親友、ファーノのルカに引き渡すものとします。だって、ルカはこの世でいちばんの正直者で、ベネデットさんを尊敬していて、パシフィカをほかの誰にも負けないくらい愛しているんだもの。それに、パシフィカも彼のことを愛しているのです。大公様も、それで何もかもうまくいくとおっしゃってくださるでしょう」

彼――そこにいる誰よりも偉大な七歳の画家――は、真

面目に、また子供らしい無邪気な大胆さでこう言いました。
ベネデット氏は、この上なく深刻な顔つきで、動揺して、口もきけずに立っていました。ルカは前に飛び出して、片膝をつきました。彼は灰のように青ざめていました。ラファエロは微笑んで彼を見ました。
「僕の大公様」彼は、小さなやさしい微笑を浮かべて言いました。「大公様は僕の作品を選んでくださいました。だから、僕の権利をお守りください」
「天使の声を聞くがよい、善良なるベネデット。神がこの子を通して話しておられるのだ」グイドバルドは、陶芸の師匠の腕に自分の手を置いて、おごそかに言いました。
厳格なベネデット氏は泣き出しました。
「私にはこの子を拒むことなどできませぬ」彼はすすり泣きながら言いました。「この子は、世界中の誰も見たことがないようなすばらしい栄光を、ウルビーノにもたらすでありましょう！」
「では、ラファエロが勝ち取った美しいパシフィカを呼んで来い」公国の君主は言いました。「私は、このすばらしい甕の中に詰め込める限りの黄金を、彼女の持参金として与えるものとする。彼女を愛し、彼女が愛する誠実なる若者よ――これ以上の何が望めようか、ベネデット？　さあ若者よ、立て、そして喜べ。今日この日、天使がそなたのために降臨したのだ」

しかし、ルカは聞いていませんでした。彼はまだラファエロの足元にひざまずいたままでした。その足元には、その後ずっと、全世界の人々がひざまずくことになりました。

（ウルビーノの子供　完）

ランプブラック

ある日、哀れな黒の絵の具がたった一人、ひどく悲しい気分でチューブの中に横たわっていました。画家の絵の具箱から転げ落ち、一年間もまったく気づかれずにいたのです。「僕はしょせんはランプブラックでしかないんだ」彼は独り言を言いました。「画家のご主人様は僕のことを決して見ようとしない。僕のことを、鈍重でつやがなくて、役に立たないと言う。かわいそうなフレイクホワイトがそうだったように、僕も固まって乾燥して死ねたらいいのに。ご主人様が彼女を、黄色く変色したから捨てようと考えた時みたいに」

けれども、ランプブラックは死ぬことができませんでした。彼は、壊れた木炭の破片やさびたパレット・ナイフと一緒に、ただスズのチューブの中で横たわり、愚か者のように思い焦がれることができただけでした（愚か者というよりは悲しむ者でしたが）。ご主人は、彼にまったく触りませんでした。何ヶ月かが過ぎても、彼が思い出されることはありませんでした。ほかの絵の具にはみな大きな幸運を得る時機があり、多くの美しい形と役立つものに変形させられ、大喜びしながら、偉大な芸術院や巨大な宮殿へと出ていきました。しかし、ランプブラックはいつも単調で品のないものとして見過ごされました。実際、彼はそのとおりで、それを自分でもわかっていましたが、かわいそうに、それが事をいっそう悪くしたのでした。「おまえなんか、付着物でしかないんだぞ！」ほかの絵の具が彼に向かって言いました。彼は、それがどういう意味なのか、ちゃんとわかったわけではありませんでしたが、付着物であることは恥ずべきことだと感じたのでした。

「僕がほかの絵の具たちのように幸せでさえあったなら！」哀れですすけたランプブラックは、隅っこで悲しみながら考えました。「ここには今ビスタがいる。彼は、僕よりそれほど見映えが良いわけじゃない。でも、彼なしでは何もできない。彼がいないと、少女の顔なのか川のさざ波なのかも区別ができない！」

ほかの絵の具は、開き窓がマートルとパッションフラワーで飾られ、静寂がナイチンゲールの歌で満たされたこの美しく明るいアトリエで、みんなとても幸福でした。コバルトは、一筆二筆で、夏の朝の空の美しさになりました。レーキとカーマインは、たくさんのすばらしく美しい花々と、画家の想像力の中で輝きました。クロームとオーカー（ただの鈍い天然土性顔料でしたが）は、暗黒の場所に太陽の輝きを描いた、その金色の広がりの中に塗られることを許されました。アンバーは、黒ずんで憂鬱な色でしたが、なお子供の巻き毛の中に潜み、子供の微笑み中で笑うこと

ができました。朱、青、緑の一門はすべて、日の出や日没、大海の波や秋の木々、王の華麗な行列や戦争の壮麗な行列の栄光の中に生きていました。

それはたいへん無情なことでした。哀れなランプブラックは、彼が深く愛していたかわいくて小さなローズマダーのことを考えるときは、とりわけ、まるで本物の心臓が壊れてしまったように感じました。彼女は、いつもバラ色の雲やバラの芯や何か美しく気高いもの以外の場所には身を置きませんでしたから、たいへんプライドが高く、そのために彼のことなどまったく眼中になかったのです。

「僕は惨めな付着物にすぎないんだ！」ランプブラックがため息をつくと、さびたパレット・ナイフが不平を返してきました。「わし自身の人生は汚れた絵筆をきれいにすることで損なわれたが、それに対する人間と絵筆の感謝がどんなものであるか、見てみるがいい！」

「でも、あなたは少なくとも一度は役に立ったでしょう。なのに、僕は一回も、まったく全然使われていないのですよ！」ランプブラックは、うんざりしたように言いました。実際、彼は、蜘蛛が銀色の糸を吐いて彼をすっぽりと包んでしまうほど長くそこにいて、古い瓶が地下室でそうなるのと同じくらい灰色に変色しました。

アトリエのドアが開いたその瞬間、光の洪水が押し寄せ、人の足音が聞こえました。すべての色は跳び上がらんばかりに喜びました。足音は、彼らの魔術師のものだったからです。その人は、ちょっと触れただけで、ただの普通の粘土と地上の鉱石から、彼らを不滅の神々の壮麗さにまで引き上げることができるのでした。

哀れな汚れたランプブラックだけは、いつも一人ぼっちで取り残され、一顧の価値さえないと思われていただけに、胸を高鳴らせることなどできませんでした。けれども彼は、その日の午後は――おお、奇跡と忘我！――、自分の感覚が信じられませんでした。ご主人の足音が、蜘蛛の巣で覆い隠され、その下に彼が横たわっている部屋の片隅に向かって、床を横切って来たのです。そして、ご主人の手が彼に触れました。ランプブラックは、気分が悪くなり、狂喜のあまり気が遠くなりました。ついに認められる時が来たのだろうか？

ご主人は、彼を手に取って持ち上げました。「君は、この仕事に使える」彼は言いました。ランプブラックは、震えながらイーゼルの所へ運ばれました。今度ばかりは自分たちの順番が無視されたほかの絵の具たちは、鎧甲を着けた小さな戦士の列のように、輝くスズのチューブの中で眺めつつ、監視のために群がり合っていました。

「あいつは地味でどんよりした付着物なのに」彼らはお互い不平を言い合いました。それは軽蔑したような感じがありましたが、軽蔑的な人々がしばしばそうであるように、

彼らは詮索好きでもあったのです。
「でも、僕は栄光と偉大さを手に入れるんだ」ランプブラックは思いました。彼の心臓ははち切れそうなくらい高まりました。ほかの色たちが彼に付着物という名を投げつけることは、もうできないだろうからです。その名は、理解できなかったにもかかわらず彼を傷つけるものでした。理解できなかったがために、なおさらそうであったのです。
「君は、この仕事に使える」ご主人は言いました。そして、ランプブラックをその金属製の牢獄から光の中に出してやり、魔法の杖である絵筆で触れたのでした。
「僕は何になるんだろう?」ランプブラックは思いを巡らせました。大きな縦の板きれの上に載せられたのを感じましたが、あまりにそれが大きすぎて、たくましい人間の輪郭か、少なくとも大嵐の暗がりに仕立てられるに違いないと感じました。
彼は、自分が何になったのか、自分では言うことができませんでした。彼は、ただ使われたことで、じゅうぶんに幸せで、じゅうぶんに思い上がっていました。そして、彼は使用されていくにつれて、夢を見始めました。自分がそこに存在することになるであろうあらゆる場面、自分が身に着けるであろうあらゆる色合い、ご主人が崇拝されているすばらしい世界の中に自分が出ていくとき耳にするであろうあらゆる称賛。こういったたくさんのことを夢見たのです。その秘密の夢から、彼は気分悪く目覚めさせられました。絵の具みんなが笑っており、彼らが着けた小さなスズのヘルメットまでが彼の周囲でくすくす笑っていて、浮かれ騒ぎで揺れていたのです。
「あの付着物の奴、看板になるんだぜ」彼らが互いに、あまりに陽気に叫び合ったので、人付き合いが良いとは言えない生き物である蜘蛛たちまでもが、巣の入り口にやって来てくすくす笑いをすることを強要されたような気がしました。看板！　ランプブラックは、板の上にうっとりと引き伸ばされて、震えながら夢から目を覚まし、自身の変容ぶりを見つめました。彼は七つの文字に仕立てられていました。こんなふうな。

B・A・N・D・I・T・A

イギリス人画家のアトリエがあったイタリアの地方においてのこの言葉は、こんな意味でした――勝手に入るな、撃つな、ここに姿を見せるな。あらゆる侵入者に対して、実に威圧的で不作法なものです。板の上に広がったこの七文字の中に、ランプブラックは磔にされていたのです！
さらば、大望と幸福な夢！　彼は看板を描くのに使われたのでした。それは、男の子たちに石を投げられたり、風に吹かれたり、ネズミにかじられたり、冬の雨でずぶ濡れになったりするものです。こんな辱めに比べれば、以前いた片隅のほこりと蜘蛛の巣の方がマシだった！

"OLD DEPOSIT IS GOING TO BE A SIGN POST."
「あの付着物の奴、看板になるんだぜ」

しかし、何も助けはありませんでした。彼の運命は決まってしまいました。テレビン油の溶液が塗られ、それが固まると、急いでコーパルの外套を着せられ、彼が己に降りかかったすべての苦難をじゅうぶん意識するよりも前に、屋外の大きな板の上へと運ばれ、庭師の手に渡されたのでした。ご主人は短気で情熱的な人で、その日、モチノキに住んでいたお気に入りの青ツグミが虐殺されたことで焦燥感に駆られていましたから、それで急いで自ら職人の仕事をすることにしたのです。最終的に、ランプブラックはアトリエから運び出されましたが、ドアに近づいていく時にほかの絵の具全員が笑っているのが聞こえました。あのかわいいローズマダーの笑い声は、彼女がナポリイエローに向かって叫んだ時にいちばん甲高くなりました。ナポリイエローは伊達男で、彼女に言い寄っていたのです。

「惨めで醜い付着物！　これからはフクロウやコウモリに不平を言うことになるのね！」

ドアが閉ざされ、その楽しい集団と美しい幻想の館の何もかもから彼を永遠に断ち切ると、庭師の荒っぽい手が彼をつかみ、大きな庭の、壁が公道を見下ろす端の方に運びました。そして、木の幹の周りに帯金で、高い所に彼を括り付けました。

その夜、雨が激しく降り、北風が吹き、雷まで轟きました。ランプブラックは、彼を保護するためのスズの家なしで嵐の中に放り出され、地表上のあらゆる哀れな創造物の中でも、自分ほど惨めなものはないと感じました。

看板！　ただの看板！

絵の具は芸術と画家たちのために作られるものですが、その色たちにとっての不面目は、どこであっても今の場合以上には深刻にも悲痛にもなりえなかったでしょう。おお、彼はスズのチューブと、木炭やパレット・ナイフと一緒だった静かな片隅を、どんなに恋しく思ったことか！

そこにいた頃の彼は本当に不幸でしたが、まだ常に彼を慰めるなにがしかの希望がありました。いつか幸運が微笑み、不朽の作品の、少なくともその最下層に存在することが許されるかもしれない機会が残っている、というような。

けれども、そこにはもう希望はありませんでした。彼の宿命、彼の最期は、固定され、変わることはないのです。彼がなっている以外のものに、二度と再びなることはできないのです。天気と時間が彼に作用するまでは、そこでは何の変化も望めません。その変化も、濡れた大地の上で腐り、虫食いのぼろぼろの残骸になっていくだけです。

夜が明けました。薄暗い、霧の深い朝でした。

彼が木の幹の上に磔にされた場所からは、もはや最愛の故郷であるアトリエを見ることはできませんでした。周囲には枝の黒ずんだ複雑なもつれを、下の方にはフリント壁の上にバンクシャーが生長し、夜の嵐でびしょ濡れになっ

た泥だらけの幹線道路を見ることができただけでした。
粉屋の荷車に乗って通り過ぎた人が、立ち上がって彼をののしりました。人々は、そこのご主人が木を植えた庭へやって来て、鳥たちを撃ったり罠で捕らえたりするのが好きだったからです。彼らは、もうそれをしてはいけないのだと知りました。
ナメクジが彼の上を這い、カタツムリも這いました。キツツキが強いくちばしで彼をつつきました。男の子が壁の下に来て、彼に石を投げつけ、悪態をつきました。再び土砂降りの雨が降りました。彼は幸福な絵画部屋のことを思いました。あそこはいつも夏のようで、いつも日なたのようでした。そして、午前中の今ごろは、色たちはみな華やかな美術作品の中に整列していて、彼はそれを何百回も孤独な片隅から見ていたのでした。過去の惨めさすべてが、今では幸福に見えました。
「フレイクホワイトのように死ぬことさえできたなら」彼は考えました。しかし、石はへこみを作るだけで彼を殺すことはありませんでしたし、鉄の帯金は傷を付けるだけで彼を窒息させることはありませんでした。ひどく苦しむものは何であっても、生き続けるためのたいへんな強さを持っているものなのです。彼の誠実な心は、自分をこんな運命に陥れたご主人をそしり、呪いそうになりました。
日が高くなり、正午が過ぎ、それとともに雨が通り過ぎていきました。もう一度太陽が輝き出し、ランプブラックは依然として縛り付けられ、惨めな様子でしたが、それでも濡れた葉や、蜘蛛の糸すべてにかかった水滴や、大きな枝を通して漏れ輝く青空などがどんなに美しく見えるかを、理解しないわけにはいきませんでした。なぜなら、彼は、たとえ苦痛であるにせよ、自然の美しさを一生見せてはくれない偉大な画家と、もう一緒に住んでいなかったからです。太陽が顔を出すとともに茶色の小鳥たちも軽やかな足取りで出てきました。彼らの身なりと習慣はたいへん単純で簡素なものでしたが、ランプブラックは、ご主人が夏の夜、何度も何度もその鳥たちを呼ぶのを聞いていたので、それは詩人たちが愛するものであると知っていました。茶色の小鳥たちは、軽やかにやって来て、ランプブラックが縛られている幹の下方の芝生をつついて回り、それからバンクシャーや、そのほかのたくさんの蔓で覆われた壁のてっぺんに飛び上がりました。茶色の小鳥たちは、小さな歌を歌いました。彼らは、月光を浴びて歌うことが多いけれども、昼間でも歌うし、時には一日中歌うこともあったのです。そして、彼らが歌ったのは、こんな内容でした。
「おお、なんて幸せなんだろう！　なんて幸せなのかしら！　もう網が広げられることもない、残酷な男の子も登ってこない、残酷な鉄砲撃ちが撃つこともない。安全、すっかり安全、気持ちのいい夏が始まった！」

ランプブラックはそれを聴き、彼らの小さな喉がバンクシャーの明るい黄色の花の中に注ぎ出す柔らかく澄んだ声によって、こんな苦痛の中にあってさえ感動し、平穏な気持ちにさせられました。それから、茶色い鳥の一羽がやって来て彼のそばの枝に止まり、自分の体ごと枝を揺らして、葉からこぼれた雨のしずくを飲みました。鉄に締め付けられているため、その不自由さの範囲内でできる限りの努力をして、彼は思い切って尋ねてみました。どうしてそんなに安全で、何が君らをそんなに幸せにしてくれたの？

その鳥は驚いて彼を見ました。

「知らないのかい？」彼は言いました。「君だよ！」

「僕！」ランプブラックはおうむ返しに言い、それ以上はしゃべれませんでした。というのも、惨めで愚かで鈍重な黒絵の具で、好天と悪天の中でどんどん腐っていくしかない自分を、その鳥があざけることを恐れたからです。そんな自分が、どの生き物にどんな良いことをすることができるというのだろう？

「君だよ」ナイチンゲールが繰り返しました。「君は壁の下のあの男を見なかったのかい？　あいつは銃を持っていた。僕らは君がいなければ死ぬところだったんだよ。僕らはここに来て、一晩中君に歌いかけることにしたんだ。君がそれを好きだから。それに、僕らが夜明けに寝る時には、従兄弟のツグミとクロウタドリにこの場所に来るよう言うからね。だから、君は一日中、誰かしらが君のそばで歌っているのを聴くことになるよ」

ランプブラックは黙り込んでしまいました。

胸がいっぱいになるあまり、話すことができなかったのです。

結局のところ、自分は役に立つことができたのか？

「それは本当なの？」彼はおずおずと言いました。

「すっかり本当さ」ナイチンゲールは言いました。

「では、ご主人様は最善の道を知っていたのだ」ランプブラックは思いました。

彼は宮殿を輝かせたり祭壇の上を飾ったりすることはなかったでしょう。彼の高い望みは、去年の葉のように完全に死に絶えていました。アトリエの色たちは、この世のあらゆる栄光を手にしていたけれど、彼も結局はその世界の中で役に立ったのでした。彼はこうした小さな命を守ることができたのです。彼は、惨めで、疎まれて、石で傷つけられ、嵐でずぶ濡れになりました。それでもなお、木の上に固定された彼は満足だったのです。まったく無駄になることがなかったのですから。

日没は、赤い、黄金の輝きを枝々の暗さを通して注ぎ、鳥たちは、歓びと神を称える歌を一斉に歌いました。

（ランプブラック　完）

解説

今回翻訳したのは、いずれも『フランダースの犬』で有名なイギリスの女流作家ウィーダ（本名：マリー・ルイーズ・ド・ラ・ラメー、一八三九―一九〇八）の、子供向け短編作品である。両作品とも短編集《ビンビ　子供のための物語集》（チャットー&ウィンダス、ロンドン、一八八二）に収められており、底本にはその初版を使用した。ただし、底本には挿絵がなかったため、絵については、『ウルビーノの子供』は一八八四年刊のフランス語訳版（アシェット出版社、パリ）を、『ランプブラック』は一八八九年刊のアメリカ版（J・P・リッピンコット社、フィラデルフィア）を、それぞれ使用した（『ウルビーノの子供』の挿絵のキャプションがフランス語なのはそのため）。フランス語版は挿絵が多いので、できれば両作品ともそちらを使用したかったのだが、この本は残念ながら抄訳で、『ランプブラック』は省かれていたため、このような処置にした。

ウィーダは、『フランダースの犬』のために日本では非常によく知られた作家ではあるのだが、邦訳された作品は驚くほど少なく、生前出版された本は五十冊にも及ぶのに、これまでに日本語に移されたのは次の数作に限られる。

①フランダースの犬
②休止
③ニュルンベルクのストーブ
④ウルビーノの子供
⑤モウフロウ
⑥メレアグリス・ガッロパヴォ

このうち、①と③は、新潮文庫や岩波少年文庫に全訳が収められているほか、明治から現在に至るまでおびただしい数の翻訳・翻案が出ており、ここではとうてい紹介しきれないほどである。②は、一九一四年に出た《狂犬》（厨川白村・訳、大日本図書）という翻訳短編集に、『母親』という題で収められている。⑤は、講談社の世界名作全集第一三二巻（塚原健二郎・訳、一九五六）に、全訳ではないが収められており、その後も旺文社ジュニア図書館（《帰ってきたむく犬》、山主敏子・訳、一九七三）に、幼少の読者向けの翻案が入ったことがある。⑥は、旺文社ジュニア図書館（《フランダースの犬》、前田三恵子・訳、一九六七）に、小学校高学年向けの翻案が入っていた。

今回取り上げた二作品のうち、『ウルビーノの子供』は、右の④にも挙げたように過去に邦訳が出ていた。《ヌールンベルヒのストーブ》（小泉卓蔵・訳、全国書房、一九四六）という翻訳短編集に、③や他作家の作品とともに入っていて、語彙や言い回しから見て子供の読者を想定しておらず、訳されていない文もわずかにあるものの、とにかく貴重な邦訳である。今回の翻訳に当たっては、フランス語訳とともに大いに参考にさせていただいた。『ランプブラック』の方は、おそらく今回が本邦初訳となる。

《ビンビ》には全部で九編の短編が入っているが、比較的長い六編はすべて人間が主人公で、これらは年長の子供向けに書かれているようである。その他のより短い三編は植物・無機物・動物が主人公であり、もっと幼少の読者向けの物語のようだ。ただ、どの作品もかなり専門的な語句・人名・地名が頻出するわりには、それらの説明が本文中にほとんどなく、注もまったく付けられていないため、子供では十九世紀当時の読者であっても楽に読み進められたとは思えない。翻訳に当たっては、そうした語句に注を付けることも考えたが、作家がそれを必要としないと判断したのであるから、今回もあえて注は付けないことにした。もし気になるなら、英語ではあるが、Amazon から出ている《Bimbi》抄録本に豊富な注が付けられているので、そちらを参照してほしい（Kindle 用の無料電子版には注は付いていないので注意）。

グイドバルド公（ラファエロ画）